

聖書: ヨシュア記 1:1-18

説教題: 強くあれ、雄々しくあれ

日 時: 2010年4月11日

本日から見て行くヨシュア記は、私にとって特別な思いのある書です。なぜならこの書は神学校を卒業して赴任した小倉台教会で最初に取り上げた講解説教の箇所だからです。この書を選んだのは、実は小畑先生のアドバイスによります。いよいよ卒業間近の頃、電話を下さって、「どこから説教するのか」と問われました。私は「ピリピ書から、と考えています」とお答えしたところ、小畑先生は「手紙はダメダメダメ〜！」そして真っ先に上げられたのがヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記、列王記などでした。先生いわく、神学校出たての者が書簡を講解しようとしても、正しく解き明かすことはほとんど無理。それよりも人物の動きのある物語の箇所から始めた方が良いでしょう。そうすれば聞く人は頭の中で勝手に登場人物を動かして恵まれてくれるので、説教が少々下手でも大丈夫。その代わり、「ドンドン」とか「ズンズン」とか、濁点の多い言葉をたくさん使って、みんなをハッとさせるように語れ！と教えて下さいました。私は失礼も省みずに「先生はどこから始めたんですか？」とお尋ねしたところ、「マルコだったかな〜」とお答え下さり、「ただ福音書は結構難しいんだ。あれはイエス様のお話だからな。特にヨハネの福音書はおじいさんになってから書いたものだから、あれは頭の毛が全部なくなってからでないとダメ！」

そして話をしている間に、「ヨシュア記がいい。そして1回目の説教の最後の祈りで、前任の大竹先生をモーセ、自分をヨシュアになぞらえて、『大竹先生の後を継ぐ小さき者を憐れんで下さい。』と一言祈ったら良い。ただし控え目にな！」と念を押すように教えて下さいました。本当に貴重なアドバイスだったと心から感謝しています。もちろん16年前の説教原稿を引っ張り出しても使えるわけではありません。しかしもう一度初心に戻り、新たな主の導きを頂くために、この書から始めさせて頂きたい、と願った次第です。

さてそのヨシュア記。冒頭においてイスラエルは重大な危機にありました。1節の初めにありますように、イスラエルの偉大な指導者モーセが死ぬという状況が起こっていました。その損失がどれほどのものであったか、誰が正しく測り得るでしょうか。モーセあって、イスラエルはエジプトの苦役から救い出されました。モーセあって、イスラエルは葦の海を真っ二つに分ける奇跡の中を進みました。モーセあって、イスラエルはシナイ山で主の律法を受けました。モーセあって、イスラエルは荒野の40年の生活を導かれて来ました。直前の申命記34章10~12節にこうありました。「モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかつた。彼を主は、顔と顔とを合わせて選び出された。それは主が彼をエジプトの地に遣わし、パロとそのすべての家臣たち、およびその全土に対して、あらゆるしるしと不思議を行わせるためであり、また、モーセが、イスラエルのすべての人々の目の前で、力強い権威と、恐るべき威力とをことごとくふるうためであった。」このようなモーセを失ったイスラエルは、これからどう進んで行けば良いのでしょうか。

ところが主は2節でヨシュアに「今、あなたとこのすべての民は立って、このヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている地に行け。」と言われます。モーセを失い、みなが立ち上がる勇気も気力もないのに、ヨルダン川を渡り、約束の地に入っていく！何という無茶な命令でしょうか。なぜそんなことが可能でしょうか。主は言われます。3節：「あなたがたが足の裏で踏む所

はことごとく、わたしがモーセに約束した通り、あなたがたに与えている。」主はここで約束の地はすでに「与えている」と完了形で語っています。実際に獲得するのはこれからですが、イスラエルは自分の力で勝ち取るのではなく、主がすでに備えて下さっているものを受け取るだけなのです。続く4節には、約束の地の範囲が確認されています。「この荒野とあのレバノン」とは南と北の境、また「大河ユーフラテス」および「日の入る方の大海」すなわち地中海は東と西の境を指します。これは創世記15章のアブラハムの時から約束され、繰り返し確認されて来たところです。その昔からの神の約束は、モーセの死によってキャンセルされていません。主の約束はなお生きています。そして5節：「あなたの一生の間、だれひとりとしてあなたの前に立ちはだかる者はいない。わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」ここにモーセの偉大な生涯の秘訣が示されています。それは主がモーセと共におられたということです。あのモーセの力ある働きは主の臨在の結果だったのです。その同じ主がヨシュアとも共にいて下さる。それゆえ誰一人としてあなたの前に立ちはだかる者はいない。だから「強くあれ、雄々しくあれ」と主は6節で語られます。

しかしこの働きに携わる上で、特に心に留めるべきことが7節から語られます。6節で「強くあれ、雄々しくあれ」と語られた時、それはヨシュアが約束の地で携わる軍事的な戦いを指して言うように思われました。しかし7節では「強くあれ、雄々しくあれ」という激励が、特に律法を守り行なうこととの関連で語られています。ここに重大なメッセージがあります。すなわちヨシュアが召されている戦いは、単なる軍事的な戦いではない、ということです。もしそうであるなら、馬を増やすとか騎兵を増やすとか、そういうことが語られても良かったでしょう。しかしヨシュアはここで神の律法を自分の生活の中心に置き、これを守り行なうことに心を用いるようにとされています。つまりヨシュアが召されている戦いとは、一言で言って「霊的な戦い」であるということです。単なる軍事的な戦いではなく、神の御心をわきまえ知り、その道に歩み、神との交わりの中で強められて幾多の戦いに勝利して行く。そのためには神の言葉の瞑想とこれへの服従とが第一に大切なこととして優先されなければならないのです。

この神の律法との関係において、いくつかの重要な原則が語られています。一つは7節で「すべての律法を」と言われていることです。一部分ではなく全体ということです。自分の好きな御言葉をえり好みしたり、読みやすい所だけを読むのではなく、聖書全体を言わば通読し、親しんで行くということです。二つ目は「右にも左にもそれてはならない。」すなわち、みことばをいい加減に読んで、いい加減に守るようであってはならない。サタンは私たちが悪へ誘惑する時、御言葉の一部をうまく摩り替えて、正しい道から踏み外させようとします。アダムとエバはそれでやられてしまいました。それに対してイエス様は荒野の誘惑において、御言葉を正確に引用し、そこから踏み外しませんでした。ですから私たちは御言葉を正確に心に留め、そこからそれないように自らの生活を律して行かなければなりません。そして三つ目に8節で「この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。」とあります。この「口ずさむ」とは、口でブツブツ言うという意味の言葉です。絶えず御言葉を口に出して、思い巡らす。なぜそうすべきかと言うと、8節の真ん中に「そのうちにしるされているすべてのことを守り行なうためである。」とあります。すなわち私たちは御言葉を口ずさみ、絶えず親しんでいなければ、これを守り行なう生活には至らないということです。御言葉に思いを巡らす時間や労力が少なければ、それが生活に結実して来ないのは当然。むしろテレビ

のコマーシャルや世の価値観に多くの影響を受けることは必至です。正しい生活をするための前提条件は、御言葉を口から離さず、昼も夜も口ずさむほどに多く接する生活を送ること。それに尽きるのです。

そういう歩みに大きな祝福が約束されています。7節後半：「それは、あなたが行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである。」また8節後半：「そうすれば、あなたのすることで繁栄し、また栄えることができるからである。」ここに神様の祝福の方程式が示されています。もし私たちが真に神の祝福を受けたいと願うなら、御言葉に聞き、これを守り行なう生活へと進んで行かなければなりません。招詞で読んだ詩篇1篇でも「主の教えを喜びとし、昼も夜もその教えを口ずさむ人こそ、水路のそばに植わった木のようにあり、何をしても栄える」と言われていました。また主はここで「あなたが行く所ではどこでも」と言っています。私たちは様々な困難の中で、色々な理屈をつけて、この状況、この環境では主の祝福にあずかれないのもやむを得ないなどと言いやすい。しかし主は「どこでも」と言っています。どんな場所でも、御言葉に聞き従う生活をするところに、主の祝福が約束されています。そして主は決して一人でこの取り組みをしなさいとは言っていない。9節で主は「わたしはあなたに命じたのではない。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」と言われます。私たちは自分の力で御言葉を守り行ない、神の祝福を得るようにするのではなく、一緒にいて助けて下さる主を見上げつつみことばを守り行ない、主がそこに備えていて下さる祝福にあずかって行くべきなのです。

最後に短く見たいのはヨシュアのすぐさまの応答です。10節に「そこで、ヨシュアは、民のつかさたちに命じて、云々」とあります。これは彼が直ちに主の命令に従ったことを意味しています。彼は民のつかさたちを通して民に指令を出し、ヨルダン川を渡る準備をさせます。12節からの部分にはルベン、ガド、マナセの半部族への指令が記されています。この背景は民数記32章に記されていますが、このルベン、ガド、マナセの半部族は、ヨルダン川手前、東側の地を割当地として与えられることをモーセに願い出ていた人たちでした。彼らは多くの家畜を持っており、ヨルダン川東側のギルアデの地は、まさに彼らのために備えられたような家畜に適した場所だったからです。しかしそのためにはルベン、ガド、マナセの半部族もヨルダン川向こう側の約束の地における戦いに加わることに、いやその先頭に立つて戦うべきこと、そして他の部族が川向こうにおのおの相続地を割り当てられた後に、こちら側に戻って来て住みつくことができるということをモーセとの間に約束していました。ヨシュアはこのことを彼らにはっきり思い起こさせます。7節で「モーセが命じたすべての律法を守り行なえ」と命じられた者として、はっきりとそのことをここで確認したのです。

その結果、彼らから望ましい応答が返って来ました。16～18節：「彼らはヨシュアに答えて言った。『あなたが私たちに命じたことは、何でも行ないます。また、あなたが遣わす所、どこへでもまいります。私たちは、モーセに聞き従ったように、あなたに聞き従います。ただ、あなたの神、主が、モーセと共におられたように、あなたとともにおられますように。あなたの命令に逆らい、あなたが私たちに命じるどんなことばにも聞き従わない者があれば、その者は殺されなければなりません。ただ強く、雄々しくあってください。』」イスラエルの民はこうして新しく立てられたヨシュアを新リーダーとして認めました。御言葉に立つて行動するヨシュアに、人々は主から来る権威を認めたのでしよう。またこれは御言葉に従うヨシュアへの主の守りとも見ることができます。あなたと共にいると

約束して下さった主は、御言葉に従うヨシュアを守り、新しい出発をこのように祝して下さったのです。

以上ヨシュア記 1 章。私たちが日々の歩みの中で様々な困難、危機的状況、損失、不安の中にあるかもしれません。しかし今日の箇所イスラエル以上に、困難な状況はそう考えられるでしょうか。モーセを失った、もうイスラエルに望みはないのではないのでしょうか。しかしモーセを導いて来られたのは主なる神様でした。その主が「わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう。」と仰って下さっているのです。私たちがヨシュアだったらどうでしょう。どうせなら約束の地に入るところまでをモーセに導いてもらえたら良かったのに。これから約束の地に入り、敵と戦うという一番大変なところでバトンタッチされるなんてとても困る。主よ、いくら何でもこの仕事は私に無理ではないのでしょうか。なぜこの時に私なののでしょうか、と叫びたくなるかもしれません。しかしそこにチャレンジがあるでしょう。目の前の課題がどんなに大きくても、それは主のご支配のもとで私たちに割り当てられたもの。そして主が共にいて下さると言うなら、私たちは自分にはできません！と言うことはできません。目の前の課題よりもさらに大きい主なる神様にこそ私たちは信頼の目を高く上げるべきではないのでしょうか。それゆえに主が繰り返し仰っているように「強く、雄々しくある」べきではないのでしょうか。

しかし今日の箇所で中心的に見ましたように、私たちの戦いはまず第一に霊的な戦いであることを心に刻みたいと思います。私たちはただ現実の問題に取り組むのではなく、主との交わりに生き、主によって霊的に強くされることが先です。そのためには御言葉を中心とした生活が必要であり、絶えずそれを口ずさみ、心に貯え、これを守り行なう生活が必要です。そうするところに主なる神は豊かな祝福を約束下さっています。「あなたが行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである」と。このインマヌエルの主によって、小さな私たちも、主のさらなるご計画実現のために大きく用いて頂くことができるのです。